

# 200217

## 絵本学会 NEWS No.14

発行：絵本学会

発行日：2002年1月7日

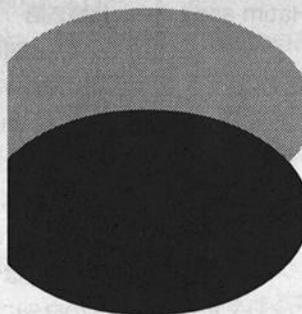
編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学芸術文化学科今井研究室内

FAX：042-342-5191

<http://ehongaku.musabi.ac.jp>.



絵本フォーラム'01 報告

第4回絵本学会大会ワークショップの報告

第4回絵本学会大会 基調講演の続き

インフォメーション－絵本関係展覧会・イベント

事務局からのお知らせ

## 絵本学会

### 「絵本フォーラム'01 報告

香曾我部秀幸

「絵本フォーラム'01」が、去る8月25日(土)世田谷文学館において開催されました。

このフォーラムは、本学会の発足後、その活動のひとつの柱として毎年企画されてきた催しですが、東京では通算5回目の開催となります。今回のテーマは「絵本とことば」。絵本をく絵とことばをトータルにデザインした表現>としてとらえ、今回はとくに「ことば」の側面から考えてみようという試みでした。

絵本の詞作家の内田麟太郎さん、絵本翻訳家の前沢明枝さん、児童教育者の今井和子さんをお呼びして、く絵本のことば・絵本とことば>について、さまざまな視点から、例によってワイワイガヤガヤと意見を交換する機会となりました。夏休み末の開催で、会員の方々へのインフォメーションも不足したためか、参加者は60名ほどの少人数に留ましたが、会場では活発な意見が飛び交い、熱気溢れるものとなりました。

内田麟太郎さんは、「さかさまライオン」(長新太絵)、「うそつきのつき」(荒井良二絵)、「がたごとがたごと」(西村繁男絵)など、注目の絵本のことばを次々と手がけられ、最近では「絵詞作家」と自称して、絵本表現におけることばと絵の関係について斬新な考えを示されています。前沢明枝さんは、言語学の視点から翻訳絵本のことばに潜む文化や民族性の問題などについて研究する一方、「アイラのおとまり」など人気絵本の翻訳を手がけておられます。今井和子さんは、長年にわたって保育者としてこどもたちと接し、絵本を読み語りしてきた豊かな経験に基づいて、「こどもとことばの世界」について研究を積んでこられました。

第1部【話題の提示】では、この3人のゲストの、それぞれのフィールドから話題が提示されました。以下に、発言要旨をまとめたものを掲載します。

#### ●〈創作の場から〉 内田麟太郎さんのレジュメ

あら あら 絵・川端理恵 文・内田麟太郎

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 1 おおきな おおきな たまごです | 7 でっかい でっかい おまんじゅうです |
| 2 きっと おおきな ひよこだな  | 8 きっと おおおとこが たべるんだな  |
| 3 あら あら           | 9 あら あら              |
| あら あら             | あら あら                |
| おおはずれ             | おおはずれ                |
| 4 ながい ながい おうちです   | 10 おおきな おおきな みずうみです  |
| 5 きっと だいじやの おうちだな | きっと おおきな さかながいるんだな   |
| 6 あら あら           | 11 あら あら             |
| あら あら             | あら あら                |
| おおはずれ             | おおあたり                |
| 12 (片ページ・ことばなし)   |                      |

#### ●〈翻訳の場から〉 前沢明枝さんのレジュメ

##### 1. 翻訳の言葉

###### 1) 翻訳について

“Take him,” said my mother.

“Take him,” said my father.

“But Reggie will laugh,” I said.

“He’ll say I’m a baby.”

Bernard Waber, Ira Sleeps Over (Boston:Houghton Mifflin Co., 1972)より

###### 2) 翻訳者の仕事

原 作 者 ⇒ 翻 訳 者 ⇒ 日本の読者

①理解：読者としての理解／翻訳者としての理解(原作者の意図)

②変換：原作を日本語へ変換／言外の意味、推論されうる意味等の変換

③確定：作品として読みうる文章へ

##### 2. 翻訳絵本の言葉

###### 1) 読む言葉・聞く言葉

・絵本というメディアに見合う言葉(書記言語)

・聞いてわかる言葉

2) 絵で語る・言葉で語る

- ・絵を読む楽しみ
- ・絵に語らせる言葉

3) 見開きの完結性

- ・見開きごとの談話の分野\*

\*M.Halliday,A.McIntosh, and P.Strevens,The Linguistic Sciences and Language Teaching(London:Longman,1964)およびB.Hatim and I.Mason,Discourse and the Translator(New York:Longman,1990)参照.

4) 文化を超えた作品としての評価

- ・国民性

- ・社会状況の変化

3.まとめ:原作者の言葉・翻訳者の言葉

[取り上げる絵本]

『モンスター・ストームーあらしがきたぞ』(ジェニー・ウィリス文／スザン・バーレイ絵／ほるる出版／1996)

『あそびにきてね』(バーナード・ロッジ文／モーリーン・ロッフィ絵／文化出版局／1996)

『アイラのおとまり』(バーナード・ウェーバー文・絵／徳間書店／1997)

『ねこがすき、くまがすき』(キャロル・グリーン文／アン・モーティマー絵／徳間書店／1998)

『かぜがふいたら』(ルース・パーク文／デボラ・ナイランド絵／朔北社／1999)

『シンプキン』(クエンティン・ブレイク文・絵／朔北社／1999)

『にたものランド』(ジョーン・スタイナー文・絵／徳間書店／1999)

『夏のねこ』(ハワード・ノツツ文・絵／徳間書店／2000)

『ふとっちょねこ』(ジャック・ケント文・絵／朔北社／2001)

●〈読み語りの場から〉 今井和子さんのレジュメ

[1] 愛情で育つ聞く力…マザリーズと絵本のことばの共通点

乳児がことばを獲得していく時のコミュニケーションの特徴は、自分の世話をしてくれる特定の大好きな人のことばを聞くことから、養われることである。それは誰のことばであっても、ことばであればよいという問題ではない。(「ことばと発達」岡本夏木)

乳児によりかけるおとのことばは、声のスキンシップ、すなわちマザリーズと言われ、音楽のような心地よさがある。このマザリーズの特徴をあげながら、絵本のことばとの共通点、すなわち快いことば体験こそ、感受能力およびコミュニケーション能力の源であることを論述する。

[2] 子どもが好む「絵本の中のことば」

ア) リズム…2拍子(心臓・鼓動)

イ) 韻をふんだもの(ひびき) 「かもさんのおとおり」

　　ジャックとマックとワックとカックは…

ウ) 繰り返し…語(感)そのものが繰り返されて、心地よい意味の意外性

エ) よびかけことば(かけあい) 「かにむかし」岩波子どもの本

　　かにどん かにどん どこへいく!

オ) 頭のトンネルにひっかかることば

「おおかみと七匹のこやぎ」福音館書店 ありさまをみたことでしょう

「3びきのこぶた」めっそうもない

力) 音のことば(擬音語、擬態語) 「きかんしゃやえもん」岩波子

どもの本

[3] 詩・子ども・絵本…「子どもの存在自体が詩」(谷川俊太郎)

・内面にひそんでいることばを、外におくりだす躍動の力をもったことば  
(例)「おなかのかわ」福音館書店

・アニミズムのことば 3歳児のことばと金子みすずの詩

・ことばをあそぶ…『あいうえおってどんなかお』『ちもちも』アリス館

・比喩造語

・リズムと韻と繰り返し

「おかあさん、かぜさんがね ほんめくって読んでたのは  
いみた、はいみた、はいみたって ぱらぱらぱらーって、ぜーん  
ぶみて みたよって どさっとおちたの そしてね、また めくった  
んだよ」なな(5歳)

《さいごに》 絵本のことば=内言 を豊かに

内言とは? 日ごろ話している他者のことばが内化されて、もう一人の自分になって語りかけてくれる→自律を育むことば

「広島の人は…」 ゆたか

生きる力のあることばを!

これらのレジュメで大体のことはお分かりいただけると思いますが、内田さんに関しては多少の補足が必要でしょう。この「ことば」は、来年出版予定の「あらあら」という絵本の「文」なのですが、まだ絵が出来上がってない段階で、内田さんのことばのイメージの世界にはどんな具体的な映像が浮かび上がってきてているのかという、きわめて興味深いお話でした。ことばと絵のそれぞれの作家が1冊の絵本を作り上げていく、いわば「コラボレーション」の場として絵本を捕らえている内田さんの「テキスト作法」には、今後の絵本表現を大きく広げる可能性が秘められていると感じられました。

第2部【談話サロン】では、3つの部屋に分かれて、それぞれのゲストを身近に囲んで、自由に発言や質問が投げかけられました。その様子を各部屋の司会を担当した企画委員に報告していただきます。

<内田俊太郎さんの部屋>からの報告

岩崎真理子

自らを、絵詞作家と称する内田さんの部屋には、30名近くの参加者が集まり、自由に内田さんに質問を投げかけ、それに答えてもらう形で始まりました。幼い子どもからおとなまで多くのファンを持つ内田さんですが、「子どもの視点で語られているような作品が多いように思うが、子どもを意識してテキストを考えているか」との質問に対して、自作の『おおきなおおきなたまごです』を例に、「おおきなおおきな」のくりかえしのことばのリズムなどは、無意識のうちにでてくるし、本能で書いているからおもしろい。子どもはお客様という感じもあるが、子どもが可愛く思えるのと同時期にそう変化してきたような気がするとのこと。また、「木が好きだから自然破壊などを取り上げて木が大事ということを訴えるような絵本を作りたいのだが、どうしたら…」という質問には、内田さん自身の体験をもとに、ヒマから生まれた自称「コタツ三部作」を例に作品誕生の秘密を語ってくださいました。コタツに入って寝転がってぼわーっとしていると、天地が逆に見えてきて『さかさまライオン』が生まれたり、コタツのふとんが波に見えてきて『うみのしっぽ』になったりと、ヒマでぼけーっとしている、つまり日常生活からかけはなれたところからの発

想だと。内田さんの作品にある、すんなりと自然に作品世界に入っていける気安さの魅力の秘密を聞いたような気がしました。

後半は、未発表の作品を紹介しながら、ご自身の絵本論をいろいろな形で話してくださいました。たとえば、テキストを創るとき、その画家でしか描けないようなテキスト「オンラインユーロのテキスト」を考えることや、絵本の中にある「間」や「呼吸の仕方」への心配りの数々。また絵本の中には、排除の美学とも言えるような美しいものだけを描いたものも多いが、すべてきたないものまでも描きこんだ絵本の世界について、片山健、飯野和好などを挙げてその魅力を語られました。

最後に、「昔は思想の人間だった、しかし思想がいきつく恐ろしさを知ってしまった。おとなは思想がないと不安で立っていられないけれど、子どもは違う。ナンセンスが子どもはわかる。ナンセンスは戦わない。階級がないし、ユーモアによって男女、おとなと子どものくくりを超える。絵本づくりにノウハウはない。メッセージを直接発するのは恥ずかしいが、しかしデジタルでは出している。」など、「内田麟太郎の語る絵本世界」に、参加者全員が魅了された楽しいひとときとなりました。

(いわさき・まりこ 企画委員)

#### <翻訳の部屋ー前沢明枝氏>からの報告

川西美沙

翻訳の仕事をしている人、翻訳家志望の人、編集者、幼児心理の専門家、絵本愛好家などが参加し、各自己紹介の後、前沢氏が翻訳した絵本を紹介しながら、それらの本にまつわる体験談を具体的に話し、その後、質疑応答の形で“翻訳”がさまざまな面から取り上げられ、話し合われた。翻訳者の役割、翻訳の在り方、翻訳する本の選書の仕方、絵本に見る各国間の文化の相違などに質問が寄せられた。前沢氏からは、一見不気味で、ユニークな絵の絵本『かぜがふいたら』の場合、編集者の立場からは「日本人向けではないのでは？」という危惧が示されたが、絵の好みは各人各様であるし、子どもには可愛くて、やさしいものをという大人の先入観を超える勇気が編集者には必要であると説得し、翻訳出版が実現したこと。翻訳する本は、自分の判断で良否を決めること。『アイラのおとまり』では最初、なるべく言葉を変えないように訳したが、それではアメリカの生活体験がないものには伝わらないことに気がつき、言葉を変えて訳したこと。英語とは違い、日本語では社会的要因を使い分けなくてはならないが、その場合、選ぶ言葉は絵からもらうイメージ、文脈から決まる。『シンプキン』の場合、原作は数を数える類の単純な内容の本だったが、訳で主人公のシンプキンに存在感を持たせ、結果として本にストーリー性と生き生きした味わいが備わったこと。などの説明があった。翻訳者はコミュニケーションの役割を果たすもので、裏方でなければならないが、原書の絵や文章をしっかり読み込んで、作者の真意をつかみ、それを日本人によく伝わるように作り変えることが大切である、との指摘には、翻訳を言語学の一つのカテゴリーとみなす前沢氏の姿勢が感じられた。時間の制約もあり、絵本の翻訳の特性、絵で語る部分と言葉で語る部分の相関性、意訳など、もう少し問題を絞り込んでの話し合いまではいかなかったが、これから本格的に翻訳を始めようとしている人たちには実り多い機会だったと思う。幼児心理学で教鞭をとっていた参加者からは、外国の絵本では家族の情景を大切にし、父親がきちんと描かれている。日本の絵本にも父親をもっと登場させる必要があるのではないか、との発言もあった。

(かわにし・ふさ 企画委員)

#### <今井和子の部屋>からの報告

生田美秋

子どもにとって絵本とは何かというテーマを、絵本のことばにこだわって考えてみようという第一部の今井報告「絵本のことば」を受け行なった。参加者は幼稚園教諭、保育士、図書館司書、地域文庫や小学校で語り（「読み聞かせ」「聞き読み」「読み合い」などの呼称があり学会での議論も必要だが、ここでは「読み語り」統一した）ボランティアをしている人12名。日頃の体験をふまえた活発な質疑が交わされた。

最初の自己紹介を兼ねた読み語りの実践報告では、歌を交えたり、人数が多い場合にはペーパーサートや大型絵本を使うなどの工夫をしている例が報告された。読み語りを通して、子どもたちが作品世界に入りこみ、夢中になって聞き耳を立て、体全体で喜びを表現するのが実感として分かり、ますます語りの魅力にとりつかれていたという参加者が多かった。一方で、絵本に集中できない子どもの絵本離れが心配であるという超え、読み語りのボランティア希望の参加者からは信頼できる案内書や気楽に相談できる場が意外に少ないという超えもあった。今井氏は、子どもの教育という観点からではなく読み語りを通して楽しみながら絵本や言葉の魅力、おもしろさを伝えてほしいとアドバイスした。今回のテーマでは必ずしもないが、書店勤務の参加者からは、子どもが図書館でかりた本を選ぼうとすると、「それはもう読んだでしょう」、文章の少ない絵本を選ぼうとすると、「もう大きいんだからもっと文章の多い絵本にしなさい」と言っている光景をよく目にするとその発言があり、絵本に対する理解はまだ不十分であるとの思いを強くした。

次に、子どもが好む「絵本のことば」として整理されたリズム、韻をふんだもの、くり返し、よびかけことば、頭のトンネルにひっかかることば、音のことば（擬音語、擬態語）を基に、読み語りで子どもが好きな絵本とその特徴について意見交換をした。導入部分で歌を交えながら読む「できるよできるよ」（エリック・カール）、折り紙を取り入れた「坊さまとカラス」、小さくたためるので出掛ける際に持つて出て、子どもがぐずった解きに使える「ピーター・ラビット」の布芝居、大人に受け入れられる前にいち早く子どもに人気になった「サル・ビルサ」（スズキ・コージ）や「タンゲくん」（片山健）、「もっこもこ」「ことばあそびうた」（谷川俊太郎）なども次々に紹介された。

子どもの好きなことば遊びの絵本については、子どもはことばの意味だけでなく、リズムや響きに敏感に反応する例も紹介された。一般に大人は絵本をことばを通してストーリーだけを追うくらいがある。一方子どもは一生懸命に見入り、絵から物語を読み取ろうとし、大人には読み取れない（見過ごしがちな）世界を教えてくれることが少なくない。今井氏はここにも大人と子どもの絵本の見方の違いがあると指摘した。

最後に、最近の子どもたちの絵本の読み語りへの反応の変化と原因、今後の対策について議論が交わされた。長年に亘って読み語りをしている方から、じっと聞いていられない子ども、おかしい場面でも笑わない子ども、少し長い話になると集中して聞けない子ども、目を見ない子どもなどの例が報告された。これらの子どもの変化が脳科学者が指摘する核家族化、少子化、都市化、父性・母性の希薄化による大脳の活動水準の低下が原因だとすると問題の解決を個々の家庭にゆだねるだけでは不十分である。図書館や地域文庫に来る親子は、両親自身が小さい頃読み語りの楽しかった思い出を持っている場合が多い。こう考えると両親が絵本に触れることの少ない子どもたちへの取

り組みがあらためて重要な課題として浮上してくる。議論はブックスタートの話題に及んだが、この問題は絵本学会でのラウンドテーブルでの議論を前回ニュースで報告したのでここでは省略する。

今井氏の重要な問題提起がありながら、時間の関係で議論できなかつた、「日ごろ話している他のことばが内化されて、もう一人の自分になって語りかけてくる」ことば=内言について、アニミズムのことばの意義、子どもの発達にとって絵本の持つ意義を脳科学や発達心理学の研究をふまえて明らかにする課題、子どものいじめ、自殺、校内暴力、学級崩壊、援助交際など現代日本にままで延している社会的病状の原因究明と幼児期の絵本や子守唄の果たす意義についての検討は今後の課題としたい。

(いくたみあき／運営委員)

第3部【座談会】は、再び一つの会場に戻り、ゲストからは第1部で言い残したことが補足され、参加者からは質問・疑問が投げかけられる場となりました。

今回のテーマでは、「絵本表現の重要な要素としての“ことば”的あり方」、「翻訳絵本における絵とことばの表現のずれの問題」、「読み語り・読み聞かせの場におけることばの役割」などについて考えることを目標としていましたが、話題は尽きることなく四方八方に飛び、何かまとまった結論を導き出すには至りませんでした。でも参加者の多くからは、【楽しい時間を過ごせた】との声をいただきました。

もとよりこのフォーラムは、明確な結果を出すべき場ではありません。ただ言いつ放し、やりっ放しに終わらず、今後も同等の関心を持続させ、話題を深化させていく姿勢が必要であると感じています。

企画委員会では、今後も絵本フォーラムを継続して開催していく予定であります。絵本学会会員の皆様の一層の積極的参加を待ち望んでおります。

(こうそかべ・ひでゆき 企画委員)

## 第4回絵本学会大会 ワークショップ報告 ビバ！お化けーしょん -絵本づくりワークショップ-

石井光恵(日本女子大学), 笠尾敦司(東京工芸大学)

第4回絵本学会大会のワークショップ報告について。前回の絵本学会NEWS (No.13) の大会報告で、あれっ？ワークショップもあったはずなのに報告がない、と思われた方もおられた事だと思います。実は、あのワークショップには重要なその後がありまして。その作業中ということもありまして、今回の絵本学会NEWSでの報告となりました。第1部ワークショップ大会報告は石井光恵(日本女子大学)が、第2部お化けーしょんのコンセプトについて は笠尾敦司(東京工芸大学)が報告いたします。

### 第1部 ワークショップ報告

この「お化けーしょん」というワークショップは、今回、東京工芸大学と日本女子大学合同のワークショップ企画となりました。もともとは、東京工芸大学で笠尾敦司さんが進められていたワークショップです。もちろん、現在も活発に進行中です。このワークショップは「一つは絵本作りを通じて子どもの創造性を育てる事であり、もう一つは、子どもの個性を見極めながらその子どもにあった教材を大学生が作り出すことによって、大学生の情報デザインの力を伸ばすこと」という二つの目的をもっています。したがって、子どもたちに絵本作りを楽しんでもらうことはもちろんのことですが、情報デザインの学びをしている東京工芸大学と、児童学という子どもに深い関心を寄せて学ぶ日本女子大学の学生が、協同してワークショップを展開することで、それぞれの分野を深めていく絶好の機会となるワークショップでした。

このワークショップの基本的な考え方は、2部の「2.お化けーしょんホームページと子どもはメディア」の項で詳しく笠尾敦司さんによって解説されていますので、そちらをご覧ください。この紙面では、絵本学会大会で行なったワークショップの様子を順を追ってご紹介します。

まず、このワークショップの概要をご説明しておきましょう。

- 1) 子ども1人にデジタルカメラ1台を渡し、フェリス女学院大学の近辺や近くの裏山を散策しながらお化けを発想できそうなものを撮影する。
- 2) 大学生は子どもと一緒に散策しながら、子どもから会話を通して



みんなでワイワイ話し合いながら制作中

個人情報（その子の好み、性格、兄弟等）を収集する。

3) 部屋に戻って、今撮影してきた写真をもとに、お化けを考え、それを具体的な形にして全体でお化け地図を作成する。大学生は、子どもがお化けを考え、具体化していくための援助を適宜していく。そして、ワークショップ第1日目の最後に、自分たちの考えたお化けについて子どもがそれぞれ発表する。

4) 東京工芸大学の学生は、子どもが考えたお化けと子どもから収集したその子の個人情報をもとに、個性を生かしたお化けのステッカーを制作する。

5) 東京工芸大学の学生が制作した教材（お化けのステッカーと人物ステッカーなど）を子どもたちに配付する。

6) 子どもたちは、その教材を使ってストーリーを練り、一冊の絵本に仕上げる。お化けカードや人物カードは、子ども同士で自由に交換でき、さまざまなお化けを絵本に登場させることができる。学生は、子どもがストーリーを考える手助けをしたり、子どもが自分の思いを実現していくようにさまざまな角度から援助していく。

7) 第2日目の最後に、できた絵本を子ども自身がお互いに発表し、保護者と一緒に鑑賞する。

以上が、「お化けーしょん」のワークショップの概要です。今回のワークショップもこの手順で、4月14日（土）に1)～3)、5月5日（土）5)～7)の2回に分けて行なわれました。

楽しいお化け探しとなり、そして、子どもたちが容易にワークショップに入り込めるように、大学生たちは、このお化け探しを「お化け捜査隊」という架空の設定にし、一体感を高めるために捜査隊員バッジや、フェリス裏山捜査本部といった看板を作成。（5ページの図参照 フェリス裏山お化け捜査隊の捜査隊員バッジ）第1日目にみんなで考えたお化けを記入して作るお化け地図も、下見をした際に、神社や大きな木など目標物をチェックし、それを記入した「裏山捜査地図」を模造紙で制作して、雰囲気作りに努めていました。

第1日目（4月14日）のワークショップ。先ず、全体に「お化けーしょん」についての説明をします。そして、子どもと大学生がペアになって行動しますので、ペア作りをして仲よしに。次は、さあ、お化け探し。お化け探しでは、子どもと学生がペアになり子どもの撮影した場所を学生もしっかりと把握。子どもたちが具体的なお化け作りをしていく際に、さまざまな角度からアドバイスができるようになっていました。子どもたちは、嬉々として写真撮影を楽しめます。そして目に付く所、目に付く所と飛び回りますので、追いかけるのも一苦労。ご苦労様。



難しい所はお姉さんに手伝ってもらって

お化け探しから帰ると、さっそくにお化けの手配書づくり。自分たちの撮ってきた写真から、さまざまにお化けをイメージしていきます。まず、お化けのいる場所を1枚の写真に決めます。その写し出された「場」から、そこにいるであろうお化けのイメージを起こしていきます。木に大きなうろがあったり、笹が密集していたり……。大きく写ったマンホールの蓋からでも、お化けのイメージは生まれてきます。

大学生たちは、子どもたちが語る、あるいは図示するお化けのイメージを丁寧に引き出しています。東京工芸大学のメンバーは、それをステッカーに作り直していくので、出来る限りのお化けに関わる情報を子どもから集めます。1日目の終わりは、子どもたちによって描かれたお化けを、お化け検査地図に貼って、全体で発表して終了となります。

第2日目（5月5日）のワークショップ。「お化けーしょん」を説明したパネルや、また第1回目に子どもたちが考えたお化けをステッカーに制作し、そのお化けの説明をつけたパネルを会場にかざって、視覚的にギャラリーに理解してもらえるよう用意しました。子どもたちは、自分が考えたお化けがステッカーになって並んでいるので、大喜び。ほかの友だちのお化けも一挙に見ることが出来、興味津々でした。

ステッカー化されたお化けは、次に絵本になっていくのですが、自分の考えたお化けだけでなく、他のお化けも登場させることが出来るように、お化けの交換をします。子どもたちがお化けを交換しやすいように、今回はお化けのお店を設定し、お化けの名前をつけたお店の看板を用意しました。お店は大盛況。売り切れの出る人気お化けもありました。ステッカーには、子どもが絵本作りでストーリー展開を容易にするために、お化けのほかに、主人公の人物ステッカー（表情やポーズを何種類かと低学年は一体型の人物ステッカー、高学年には手や足のパーツに分けたステッカー）が用意されました。また絵本作りをより楽しくするために、子どもの嗜好に合わせた服装や小物のステッカーも用意されました。

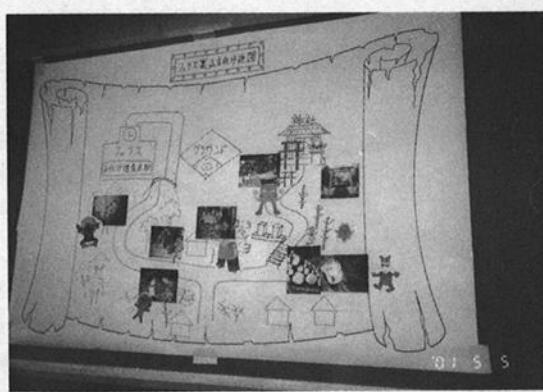
さあ、絵本作り開始。まずは、下書き用紙でステッカーを並べながらストーリーを考えます。もう事前にストーリーを考えてきた子もいましたが、新しいお化けをお化けのお店で仕入れてきたことから、お話を組み立て直し。大学生たちと楽しい会話がなされます。その会話から、ひらめいて次の展開へと進める子もいます。

お化けのステッカーのほかに、色鉛筆、金銀マーカー、色マーカー、千代紙、のり、はさみ等が用意してあり、好きなものを使ってお話を

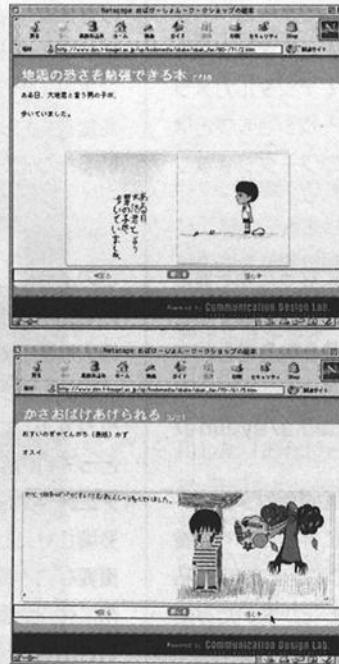
りは進んでいきます。大学生は、子どものイメージに合わせて、ステッカーを切り離してあげたりして援助していきます。子どもの必要とする援助はしますが、大学生の方からは手を出しませんので、子どもたちは、自力で絵本を完成させていきました。じっくり型の子どもには、時間が足りないようでもありました。全員が完成したところで、他の子どもたちと保護者、見学者の前で、自分の作った絵本を発表。大会のラウンドテーブルが終了した時間が、ちょうど発表の時間と重なったため、たくさんの方々に見ていただきました。子どもたちは、自信作を大はりきりで発表していました。胸をはってということばが、どの子にも当てはまるような、そんな輝いた発表でした。うれしかったのだと思います。今回2日目は、低学年、高学年に分けて2会場にしましたので、その会場ごとの発表となりました。

以上のように、子どもが実際に参加して行なわれたワークショップは、子どもにとっても大学生にとっても楽しい絵本作りのワークショップになりました。大会後、ここで作られたお化けとその絵本は、すべてネット上で見ることが出来るようになっています。

今回のワークショップ企画は、絵本学会のフォーラムで笠尾敦司さんと石井が偶然に出会ったことにそのはじめがありました。絵本学会が出会いの場となって、お互いの大学でできることと一緒に、と始まったものです。実際にこの計画を遂行していくに当たって、何度もミーティングを重ね「お化けーしょん」への理解を深めていました。日本女子大学の学生は、実際にデザインをして次々ともとのを作り出していく、東京工芸大学の学生さんのエネルギーッシュな行動に、感嘆の賛辞を惜しませませんでした。はにかみ屋の東京工芸大学の学生さんに比べて、日本女子大学の学生は子どもと一緒に何かをすることが大好きな学生ばかりです。積極的に子どもの中に入って、当日のスケジュールをこなしていました。子どもと一緒にお手の物とばかり、写真を撮りに山を駆け回り、おしゃべりしながら絵本と一緒に作って、子どもの発想の豊かさに目を丸くしていました。よい経験になったことだと思います。東京工芸大学では、その後も学生主体でワークショップを積極的に展開中です。ネット上でも「お化けーしょん」が楽しめます。その報告は、次の笠尾敦司さんの報告に譲ります。また、今回大会事務局を指揮された藤本朝巳さんには、参加する子どもたちに声をかけて集めていただき、大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。



みんなの発表を見るのも楽しい



<http://www.dsn.t-kougei.ac.jp/obake/>

## 第2部お化けしょんのコンセプトについて

### 1. インターネットでのお化けしょん作品公開

今回実施された絵本学会での公開ワークショップは参加した子どもが絵本好きであったということもあり、子ども達は楽しめていたようでした。もちろんこのように、その場で楽しめることが大切なのですが、子ども達が作ったお化けやお化け絵本そのものが創造的で、子どもの両親以外の人が読んでも面白い作品に仕上がるということも大切です。デザイン、芸術、商品、サービス何でもそうですが、公開され多くの人に見てもらえるということが、質の向上には欠かせません。公開することで、優劣がつきやすくなってしまう面もありますが、多くの人に見てもらう、また、感想や批評をもらうチャンスを作り出すことになります。そのような意味から、今までのワークショップで制作されたお化けやお化け絵本はできるだけ公開するようにしています。またそうすることで、遠く離れた親戚の人にも見てもらえるようになりますので、子どもとしてもうれしいはずです。今回の作品も既に公開されています。お化けはお化けしょんのトップページからたどり見ることができますが、直接以下のアドレスを入れることで、絵本学会で作られた作品を見ることもできます。もし可能であれば、絵本学会のページにリンクを作ってもらい、そこからクリックで入れるようにしたいと思います。

子ども達の作ったお化けは

<http://www.dsn.t-kougei.ac.jp/cgi-bin-adm/project/obake/room.asp?option01=workshop6>

に、また、できあがった絵本は

<http://www.dsn.t-kougei.ac.jp/cp/kodomedia/obake/workshop/workshop5/>

においてありますので、ごらんください。

### 2. お化けしょんホームページと子どもはメディア

インターネット上の公開絵本を紹介したので、この章では、お化けしょんのホームページについて簡単にご紹介します。ホームページを説明するにあたり、お化けしょんの上位概念である「子どもはメディア」という活動についてもお話しする必要があると思いますので、合わせてご説明いたします。

### 2.1 子どもはメディア

お化けしょんで、私たちが、絵本を作成することで子どもの発想を伸ばすということと同じくらい気をつかっているのは、参加した子どもが生活している地域の中でメディアとしての役割を演じができるようにしていくことです。今回は子ども達が毎日遊んでいる場所とは異なる場所で行いましたが、いつもは、子どもの遊び場になっている場所でワークショップを行っています。これは、子どもが日常的に過ごしている町の中で何を見て、何を感じているのかが、子どもが作る絵本に表現されるようにしたいとの考え方からです。このようにしてできた絵本を親を含めた大人達が見ることで、自分たちが住んでいる町の中を大人とは視線の異なる子どもの目で見直すことができると思うのです。

これは、現代において大人は子どもの世界に対してあまりに無理解であるこの反省から生まれています。子どもへの無理解は、子どもの持っている新鮮な目線で世の中を見直すという大切なチャンスを放棄していることにつながり、結果的に大人も大きな損をしていると思うのです。

地域が子どもを育てていた頃は、子どもは自由に町の中や人の家の中まで走り回り、そのことで、いろいろな地域の情報を蓄えていました。そして、夕食の時にはお父さんやお母さんと食事をしながら今日仕入れた情報やその情報に子どもなりの解釈を加えながら話をしていたものです。つまり、子ども自身が地域の情報を運ぶメディアになっていたわけです。

現代に翻って考えてみると、町の中は危険が多いので、一人で子どもが遊べる場は少なく情報収集の機会は減り、子どもも大人も忙しいので、一緒に夕食を食べる時間さえなくなってしまいました。このような状況そのものを時間を掛けて改善し、ゆとりある生活を手に入れていくことは大切ですが、今できることをやっておくことも大切だと考えています。まず、子どもの視線を保存すること、そして、その視線とそれから考えた子どもの発想を大人が共有できること。この二つに焦点を絞ってワークショップを企画しました。これが子どもをメディアとして捕らえた一連の「子どもはメディアプロジェクト」のコンセプトです。多くのワークショップで子どもの視線を記録する装置

としてデジタルカメラを使い、それを提示する場としてホームページを使います。よくあるメディアの使い方教育の一環としてデジタルカメラを使わせるのではなく、視線の補足の装置としてデジタルカメラを使っているところが他のデジタルカメラを使うワークショップとは似てはいても異なる点なのです。お化けーしょんのワークショップ以外に今まで行ったものを以下に紹介します。

## 2.2 「子どもの目線」プロジェクト

回数は多くありませんでしたが、子どもの目線で気になった物を撮影させて、それをどうして撮影したかのコメントを同行者が記録するという「子どもの目線」プロジェクトは以下のページから見ることができます

<http://www.dsn.t-kougei.ac.jp/cp/kodimedia/eyeline/index.htm>

このページから生田緑地(さやこ) \_ 順路ブルーをプルダウンメニューから選択してください。背景がブルーのボタンを順に押していくと彼女の目線で写された画像と子供らしいコメントがでできます。良く私が例に出す、地面に散った桜の花を見て「地面にお花が咲いたみたい」とかのじょの言ったコメントもでできます。

## 2.3 町のサイン探検隊(矢印プロジェクト)

この他多少デザインの勉強も考えた町のサイン探検隊(矢印プロジェクト)もあります。

<http://www.dsn.t-kougei.ac.jp/cp/kodimedia/sign/index.htm>  
このページのプルダウンメニューから「矢印・・・」と書いてある項目を選んでください。(他のはデザインの参考のため教員側が作ったリンクです。)矢印はどこにでもあるし、いろいろな色や形があるにもかかわらず矢印と分かる世界唯一のサインです。この矢印を改めて観察するといろいろなことが見えてくるのです。このプロジェクトのサブテーマは「当たり前だと思っている日常のサインを観察しよう」ということです。

## 2.4 お化けーしょんプロジェクト

さて、最後にお化けーしょんですがこれは以下の URL にあります。

<http://www.dsn.t-kougei.ac.jp/obake/>

単に子どもに自分たちの町の中に何があるのかを聞いても面白い話はなかなかしてくれません。そこで考えたのが子どもがワクワクできるお化け探しを町の中でおこなうプロセスと見つけたお化けをもとに絵本を創作するプロセスを合わせたワークショップです。見えないお化

けを探すには子どもが友達と宝を隠した場所、けんかした公園、迷子になった裏山など記憶に残っている場所が役に立ちますし、また、マンホールから考えた「おすい」というお化けや捨てられてた傘から考えた「かさおばけ」など子どもが何に注目してそれから何を発想しているかなどもよく分かります。

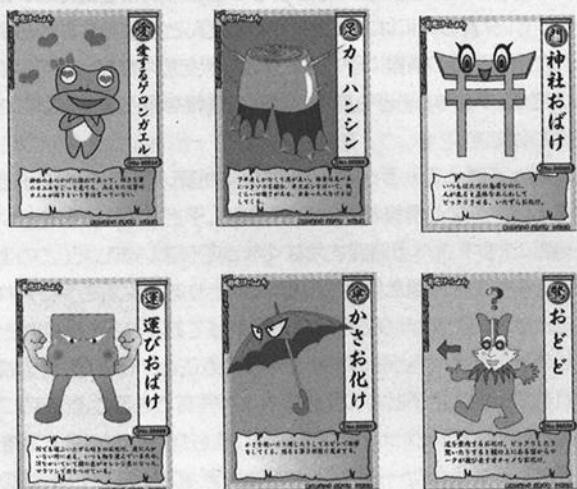
このようにして集まった町の情報をもとにおばけ絵本として作成するので、できた絵本は個人的な架空のお化けの話ではありません。その町の人にとっても興味のもてる絵本になっているはずです。ですから、インターネットで公開する意味も深いと考えています。少し話をワークショップに戻しますが、このお化け探しのプロセスは、子どもにとって町の中でみつけた物からお化けを発想させているので、単純にアニメやゲームのキャラクタなどのステレオタイプをそのまま絵本に登場させてしまうということを避ける効果もあります。これは非常に重要なことです。中学年以上の子はアニメやゲームのキャラクタに非常に強く影響を受けているため、その影響から逃れることは創造性を引き出すために大変重要な意味を持っていると思います。

また、このワークショップのさらなる特徴は子どもが考えたお化けを子ども同士が交換しながら絵本を作ることにあります。このことで、ストーリーの展開が単調になるのを防いでいます。子どもがお化けを交換できるようにするためにお化けをシールにしていることや、絵本作りの前にお化けシール交換の時間を設けるなどの工夫をしています。また、このシールも一冊の絵本を作りには不足気味の枚数しか用意していません。そのため、足りない部分は子どもが自分自身で描く必要がでできます。以上のようにいろいろな面で、一般には没個性的になるとを考えられているシールを創造性のきっかけに使おうとう試みもとり入れているのです。

このようにしてオリジナリティーの豊かな絵本が作られます。そして、はじめに述べたようにこのような子どもの目線で捕らえ発想されたお化けの絵本はホームページで公開され、それを大人が見ることで子どもがメディアとしての役割を果たしたことになります。ですから、ホームページはお化けーしょんでも大切な役割を担っているのです。

## 3.0 ホームページを中心としたお化けーしょんの今後の活動

以上述べてきたように、ホームページはお化けーしょんにおいては必





緊張しながらも笑顔で作品を発表する子ども達

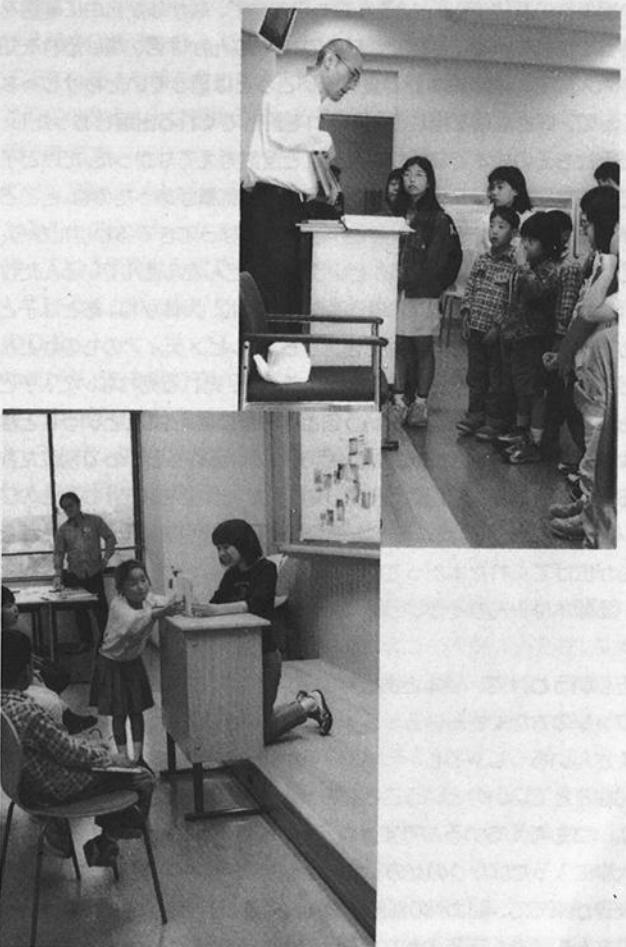
須の要素なのですが、今後はさらに大きな役割を担わせたいと考えております。現在でも作られたお化けはホームページで見ることができます。また、自分が考えたお化けを登録フォームに書き込むことで自分の考えたお化けをステッカーに作ってもらえるコーナー(ただし月に5人まで)や、作られたお化けでいろいろ遊べるお化けワールドもあります。

しかし、単なるエンターテイメントではないお化けーしょんを拡張するホームページでのプロジェクトも2つ考えています。一つは、地域で集中的にお化けーしょんワークショップを行い、その地域のお化け地図をネット上に完成させることです。これにより、子どもの目線でその地域を見直すきっかけが作れると思うのです。単発でワークショップを行ってもその地域に与えるインパクトは少なく、単に子どものワークショップで終わってしまいがちです。地域の活性化の要は子どもです。しかし、子どもを主役にするには、しつこく一つの地域でワークショップを少しずつ場所を変えながら行っていくことが必要だと思うのです。そうしないと子どもにメディアとしての機能を取り戻すことはできないと思うのです。子どもがメディアとして活躍するには、子ども自身が自分の足で町を見て回る機会と、そこで発見した物を発表する場が必要です。お化けーしょんの活動を地域興しと結びつけて考えたとき、その地域に沢山のお化けが見つかりそれをその地域の人がそのお化けを認知したとき始めて子どもがメディアとして活躍でき、その地域が活性化されるのではないでしょうか。簡単にいうと、不足してしまった子どものその地域でのメディアとしての機能をインターネットというメディアで補う試みといえると思います。

もう一つは、逆に全国いや世界規模でお化けーしょんホームページに紹介されているお化けを交換して絵本を作るプロジェクトです。つまり、お化けーしょんのホームページにお化けのシールデータをたくさん蓄積しておき、そのお化けデータをダウンロードして家庭のプリンタでシールペーパに印刷し、それと自分で考えたお化けを使って日本

中いや世界中の子どもがお化けの絵本を作れるようにすることです。もちろん、最後にはその絵本をホームページにアップすることも必要な作業になります。今のところ、地域ごとのワークショップとして実施しているため、ワークショップに参加した同じ地域の子どものお化けしか交換できません。また、当たり前ですがワークショップに参加していない子どもはお化けの絵本を作る機会もないわけです。もし、自分の考えたお化けが絵本用のシールになってホームページに登録されれば、世界中の子どもがお化けを交換しながら絵本作ることができるはずです。

以上の二つのプロジェクトがインターネットでのお化けーしょんの目指したい方向なのです。これを実現するためにはインターネットを利用した「お化けーしょん」を格段に充実させなくてはなりませんので、そのために子どもの作品の整理とお化けシールデータや子供が考えたお化けをインターネットへアップする作業が必要ですし、世界的に行なうなら英語やその他の言語のページも必要になります。また、最低限のお化けシールをセットにしたお化けーしょんスタートキットのようなシール絵本制作キットの出版も必要だと思います。そうなると、もう工芸大の一つの研究室では対応できないのでボランティアの人を募集して組織することも必要になるでしょう。実現するには、問題がたくさんありますが、少しづつ基礎を作りたいと思っています。まずはお化けーしょんの活動に賛同して協力してくれる方を集めるところから始めたいと思いますので、興味を持たれた方は私まで、連絡を頂けるようお願いいたします。連絡は電話では付きにくいので、できるだけe-mail (kasao@dsn.t-kougei.ac.jp)または、fax(03-5371-2728 電話共用)でお願いします。



## 第4回絵本学会大会 基調講演

絵本とおとな、絵本と子ども

講師：西巻芽子

※前回の絵本学会ニュースno.13で、基調講演“絵本とおとな、絵本と子ども”的文章が途中までしか掲載されておりませんでした。no.13の続きの文章です。皆様に大変御迷惑をお掛け致しましたことを、深くお詫び申し上げます。

今、現代は、相当数、絵画的な世界がおとしめられている時代じゃないかと思って、タブローなどでも、いい絵は、1960年代以前にあったのではないかと思うんです。そのかわり電子メディアとか漫画とかアニメーションとかそういうところには相当数の才能が行っちゃってる。でも絵のほうは元気がないっていうような時代になつたなというのがちょっと残念。それは余談ですけれども、絵本もそういう表現の世界で、そして子どもにどういう工夫したらいいか、そこをもう少しお話してみます。でもそこはもっと別の人のが一生懸命やってくださると思ってるんですよ。子どもの専門家っていうのは世の中にたくさんいらっしゃるんですよね。子どもに絵本を常日ごろ読んで聞かせて下さっている方たくさんいらっしゃると思うんですよね。この本は子どもが好き、あの本は好きじゃないといった情報をたくさん持っている方はいらっしゃる。その中をずっと貫いていく原理があるのかっていうことを、作者はやっぱり知りたいと思っています。原理にのっとって描けば描けるかっていえば、そんなものじゃないことはもちろん分かっているんですよ。でも子どもの心は何を楽しむのかっていう部分を私はずっと長いこと知りたかった。深く考えることはできない。自分の子ども相手にああでもないこうでもないと考えながら、これでいいからあれでいいからると、作者はいつも不安と、怖い編集者の要望(笑)と、いろんなものの中で、なかなか自由に確信を持って作品を作ることができないのね。私なんかは若い頃は恐れを知らぬ人間で、別に絵本界で食べていこうとは思っていたわけじゃないって、好きな絵を描こうと、それを許してくれる出版社あったし、出版社もその絵本でなにかなんてこと全然考えてなかった。だけど子どもになにかいい文化を作り出そうという気概があったのね。ところが、だんだん絵本はもうかるということになってきてるわけだから、どういう本出したら売れるかという研究はどんどん進んでるんだけども、それを買うのはお母さんなんだよね、大体がね。あとは子どもたちが知ってるものが大好きだから、テレビメディアのものがどんどん売れるわけですね。そういうことで、売れる売れないで、子どもの本はいい本は売れるということは一概に言えない、ということはよく分かってて、だから私の絵本が売れているからといって別にだからすぐ優れた本だとは思っていないけれど、でもまあ『わたしのワンピース』っていう本に限っていえば子どもが発見してくれて、子どもが広げてくれた本だっていうふうに思っています。長く売れ続けている絵本はみんなそういう要素を持っているんだと思っています。

そういうわけで、絵本とおとなっていう話ですが、子どもの絵本のファンの方たくさんいらっしゃるし、子どもの絵本が大好きな方もたくさんいらっしゃるし、それは何故かという問題ですが、それからそんなことでいいのということもありましたよね。そういうことも私いつも考えているんですけども、私の経験でおとなっていうか、大学に入ったばかりの女の子たちがうちに何人か来つてうちの娘の友達が来て、私は別の部屋にいたんですけども、話が盛り上がってなんの話をしてるのかなと思って聞いていると、「ぐりとぐら」の

話でした。「ぐりとぐら」っていうのは子どもたちの共有財産だと私は思いました。あれはほとんどの子どもたちが小さい頃読んでいるものだから、ぐりとぐらのどの場面が好きだったという話でものすごく盛り上がってるのは、それは絵本が文化として素晴らしい現象だというのを、小さい時に好きだったのを思い出して、絵本を思い出すことによって自分の小さい時のことを思い出して、それが他人と共有できて、みんなで楽しいひとときが過ごせる、それが文化だと思うんですね。私は残念ながら、幼い頃にのらくろを読むには遅すぎた、ぐりとぐらには早すぎた(笑)、というふうな本当に戦争中のなにもない時代に育ちましたので、友達同士での本を読んで楽しかったとか、あれはあんな時代だったとかそういう話は何もない。飢えの話ではわあっと盛り上がるんですが。何を食べておいしかったとか、初めて何を食べたとか。これもまた文化の共有だとある種思うんですけども、そういう時代でしたけれども。そういうふうにおとなが子どもの本を思うときには、子どもたちがおとなになっていく中で、幼い頃繰り返し繰り返し反芻していくことは、心が底のほうから表のほうに上がってってという、耕すというか掘り返すというか、やっぱり心にとってすごく重要な作用だと思います。

それから私たちおとなになってから絵本が好きになった人達でちょっと怪しいなど私が思っているのが、少女時代のロマンチズムってありますよね、少女時代のロマンチズムっていうのは、とっても私なんかも「ジュニアソレイユ」とか散々見てきて、だからよく分かるんですけども、あの美しさと知的さというか、あのロマンチズムっていうのと、幼い子どもがわあっと心を育てて行くエネルギーは相当なギャップがあるのね。幼い子どもが育って行く時の心の働きは、もっと根源的で強くてエネルギーがあるというその心を、少女時代に好きだったロマンチズムのお母さんが、私が大好きという本を、子どもに与えようとする。そこに相当ギャップがあるということを私はあっちでもこっちでも経験するんですよね。お母さんが好きな絵本と子どもが好きなのが相当違うのは何故かっていうと、お母さんはどうも少女時代を相当ひきずっている。あのロマンチズムは子育てにちょっとそぐわないんじゃないからという気は私は持っています。

そういうふうにして絵本はいろんな考える材料になりましたが、でも、正直言って私はそういう大きな人間の活動、それから長い歴史の中のほんの小さなジャンルにすぎないというふうにも思います。絵本は絵本と言っても、それは絵本の外側にどれだけ大きな世界があるか、どれだけ複雑な社会があるか、どれだけ人間のはたらきには広がりがあったか、そういうこと全部考えつつ絵本を考えいただきたい。絵本だけを考えて、絵本の歴史だけを考えたり、絵本の作者、西巻芽子さんを研究をしている人には、私は会いたくないですけど(爆笑)、やりたいならどうぞなさって、何も出て来ない、個人をいくら掘っても何も出て来ない。もっと大きな世界から絵本というのを見てもらいたいなというふうに思っているんですね。

いま余計なことなんだけど、そういうことの中でね、私はごたごたのを考えるのが趣味なこともあります、好奇心もある人なんですねけれども、今絵本について話してきましたが、それは、「心が育つ」ということをずっと話してきたんだと思うんですよ。表現っていうことはなにかしら心の問題と関係があって、そして今21世紀を迎えて、心の時代とか、人々はいろんなことを言っていますよね。子どもの心をどうやって育てるかとか、みんな言っているわけ。でも「心」っていう

## 伝言板

のはいったい何なのかっていうことを誰も言わないし、誰も教えてくれない。だけどみんな「心」があるっていうのは知っているし、「心」が大事だっていうことは知っている。いったい「心」って何なんだろうというのをずっと考えているんですよ。これはね、批判もあると思うんですけれどもね。

私はね、ここそこ考え方があるんですけども、もうひとつ、21世紀に「共生」っていうことが言われていますよね。共生社会、共生思想、エコロジー。地球が亡びないように、みんなで共に生きていくということを、思想として語り出しているし、実践としてもいろいろなことがなされているし。ある時ふとね、「心」と「共生」っていうのは重要なことなんだと、ふつと思った。こういうふうに考えたんですね。生きとし生けるものがね、この世界で共生していくために、個体に与えられた装置が、「心」というものなんじゃないか。そしてそのことをずっと考えていくと、動物にも植物にも「心」—ある種のセンサーがあると言われています。植物にもお互い同士隣あって、根からだか、電気だか電池だかある種の信号を発し合いながら、お互いの棲み分けをしながら、互いに減びないようにうまく循環社会を作り上げていく、自然界のこともたくさんありますよね。サボテンに歌を歌ってやったり、トマトなどもそうですが、そういうふうにして植物にも心があるんじゃないかな、もちろん動物にも。うちの猫がお葬式をしたんですが、うちの猫が死んだとき、もうひとりのうちの猫がずっと看取ったんですね。一日以上つきっきりで、そこを動かなかつた。びっくりする思いで見ました。ああ猫もお葬式をするんだ、看取るということをするんだ。だから猫にも「心」がある。「心」というものを私たちはみんな持ってて、もしかしたら共に生きていくための装置として個体の中に存在しているものが、「心」というものではないだろうか、と私は考えています。私たちは自己保存本能を持っていますよね。自己保存本能についてものすごい研究すんでいますよね。どういうものを食べたらどういう元気が出てというように、随分大きな科学を生み出しているし、それから種保存。種を保存していくために、いろんな文化やいろんな装置や、動物たちもみんなそれをやっている。ところが「共生」っていうことは動物や植物はちゃんと本能的にやってきたのに、私たちは本能として共生をしてきたかどうか、という問題がありますよね。ほんとはそのために、「心」は共生していくためにあったのではないか、と頭によぎったのね。それはいろんな人から袋叩きに遭う考えなのかもしませんが(笑い)、私は今のところそういう風に思ってます。

「心」というものは、家族、友達、社会、民族、世界、そして動物、植物とみんなつながってて、個のために「心」があるわけではない、お互いの関係のために「心」が働いている。「心」が正常に豊かにあるべき姿として発動しない限りは、人類は種として亡びて行くんじゃないっていう感じがするんですね。種の保存だけを目指すのではなく、必ずそうじゃなくて、共生する装置が個の中に埋め込まれているんじゃないかなと私は思う。それが「心」じゃないか。そういう風に人間界があるとするとね、私はとても大きく広く考えられるし、この絵本の仕事というものがどういう位置付けの中で、親と子と保育園と先生と友達と小さな仲間とそれから自然界と、そういう関係性の中に道具としてモノとして絵本が存在することが一番喜ばしいかたちの絵本の意味というふうに思っています。

相当こじつけが入っているかも知れませんが(笑)、こんなところで、私のお話を終らせていただきたいと思います。有難うございました。

(拍手)

(採録：窪田美鈴 文責：香曾我部秀幸)

●『絵本の視覚表現—そのひろがりとはたらき』を上梓しました。この本は、「美術・デザイン」の視点から絵本を複合的にとらえ、絵本のひろがりと表現の可能性を追求したはじめての本です。

中川素子（文教大学）、笹本純（筑波大学）、今井良朗（武蔵野美術大学）が共同執筆したものです。

今井良朗：絵本の可能性—新しい絵本表現の成立と発展

- ・新たな視覚表現の成立
- ・絵本表現の可能性

笹本 純：絵本の方法—絵本表現の仕組み

- ・絵と言葉のコラボレーション
- ・画面展開による語り

中川素子：絵本の力—絵本表現の新たな展開

- ・絵本が表現しえるもの
- ・見る人が発展させえる表現

絵本表現の仕組みや新たな展開を「表現」に焦点をあわせ解き明かしています。関心のある方はぜひご一読ください。

『絵本の視覚表現—そのひろがりとはたらき』 中川素子・今井良朗・  
 笹本純

日本エディタースクール出版部

2001年12月25日発行 1900円+税

(今井良朗)

## ●平和と寛容の国際絵本展「ハロー・ディア・エネミー！」

1999年4月より国内巡回してまいりました、この絵本展も2002年3月の3年間で、巡回の区切りを迎えます。今までに日本全国60カ所近くで開催していただきました。この絵本展ではミュンヘン国際青少年図書館の選本による19カ国からの絵本に各言語への訳本をふくめ100冊近くが展示されます。ミュンヘン国際青少年図書館とは日本の国立国際子ども図書館設立の際にも一つのモデルとなった世界が誇る子ども図書館のひとつです。この図書館は「子どもの本の国際連合」ともいわれるJBBY(国際児童図書評議会)の設立者でもあるエラ・レップマン女史を中心になって創られたものです。子どもの本を通じての国際理解と平和の実現を願い、人間は平和や寛容の心をはじめから持っているのではなく、学びとっていかなければならぬのだというこの絵本展のメッセージは、巡回中に起きたテロをめぐる世界情勢を抱える今こそますます重要ではないかと確信しております。2002年3月までの開催場所を以下に記載します。お近くにお住まいの方は是非ご覧下さい。詳細は下記JBBY事務局に問い合わせてください。

- \* 2001年12月22日23日 絵本ワールド沖縄：沖縄コンベンションセンター
- \* 2001年12月24日～2002年1月11日 沖縄通信博物館
- \* 2002年1月13日14日 絵本ワールド愛知：名古屋国際会議場
- \* 2002年1月8日～13日 北海道北広島市図書館
- \* 2002年1月19日～29日 長崎市立永井隆記念館
- \* 2002年1月24日～30日 福島県 岩瀬書店八木田店
- \* 2002年2月17日～24日 神奈川県小田原市 地球市民フェスタ
- \* 2002年2月26日～3月10日 神奈川県横浜市 地球市民かながわプラザ
- \* 2002年3月15日～28日 天理市立図書館
- \* 2002年3月20日～31日 静岡市コープしおか
- \* 2002年3月31日 東京都 ゲートシティ大崎（JR大崎駅東口）

問い合わせ先 JBKY 日本国際児童図書評議会  
「ハロー・ディア・エネミー！」実行委員会  
〒162-0828 東京都新宿区袋町6番地出版クラブ内  
Tel 03-5228-0051 fax 03-5228-0053

## ●軽井沢絵本の森美術館

春展  
タイトル：絵本の中の旅人展—森へ海へ魔法の世界へ—  
会期：2002年3月1日（金）～6月24日（月）  
休館日  
火曜日・1月1日（火）  
（＊年末始は1月1日のみ休館）  
＊冬期休館 2002年1月14日午後～2月28日（木）

軽井沢絵本の森美術館  
【Karuizawa museum of picture books】  
home-page <http://www.museen.org/ehon/>  
e-mail (info) [ehon@museen.org](mailto:ehon@museen.org)  
(curator-section) [curator@museen.org](mailto:curator@museen.org)

## ●大阪国際児童文学館

国際児童文学館1月の資料提供

開館時間：9:30～17:00

休館日：1月1日（火）～1月4日（金）、毎水曜日、31日（木）

代表電話：06-6876-8800

児童文学なんでも相談コーナー電話：06-6876-7479

ホームページアドレス：<http://www.iiclo.or.jp/>

E-mail : [info@iiclo.or.jp](mailto:info@iiclo.or.jp)

小展示。[川端誠絵本原画展

-『サボテンマルティ 大あらしがやってくる』を中心に-]

期間：1月5日（土）～19日（土）

サボテンたちが活躍するたのしい絵本が、どんな紙にどんなタッチで描かれたかをご紹介します。

小展示「[横山隆一追悼 フクちゃんに会おう]

期間：1月20日（日）～2月12日（火）

企画・協力：竹内オサム（同志社大学教授）

昨年11月8日に92歳で亡くなられた横山隆一さんの、子ども向け作品を約60点ほど展示します。フクちゃんを中心に、横山マンガの世界を楽しみましょう。

[こども室行事]

1月12日（土）15:00～15:30  
おはなし会「馬のはなし」

（今年のえと干支・馬の出てくるおはなしをたのしみましょう）

当日参加自由 参加費：無料

1月13日（日）第1部 14:00～14:30、第2部 14:30～16:00

「絵本作家 川端誠さんとあそぼう！」

（第1部：カルタとり大会（幼児中心） 第2部：絵本ライブ+トーク）

講師：川端誠氏（絵本作家）

対象：子どもと大人

申し込み方法：往復はがきに住所、氏名、年齢、電話番号を書いて、当館T係まで

1月20日（日）14:00～15:00  
「カルタとり大会」

（絵本を見ながら、大きな絵ふだと字ふだをつくって、みんなでカルタとりをします）

当日参加自由 参加費：無料

1月27日（日）14:00～15:00  
ワークショップ「おはなしであそぼう」

（こえやからだをつかって物語の世界を体験しましょう）

対象：6歳以上 当日参加自由 参加費：無料

国際児童文学館 2月の資料提供

開館時間：9:30～17:00

休館日：水曜日、2月14日（木）～28日（木）まで特別整理のため休館します。

代表電話：06-1876-8800

小展示「[横山隆一追悼 フクちゃんに会おう]

期間：1月20日（日）～2月12日（火）

企画・協力：竹内オサム氏（同志社大学教授）

昨年11月8日に92歳で亡くなられた横山隆一さんの、子ども向け作品を60点ほど展示します。フクちゃんを中心に、横山マンガの世

界を満喫します。

[こども室行事]

2月9日(土) 15:00~15:30

おはなし会「おこりんぼうのはなし」

(ブンブンとはらをたてる「おこりんぼう」がでてくる絵本やおはなしを楽しめます)

当日参加自由 参加費:無料

3月の資料提供

開館時間:9:30~17:00

休館日:水曜日、31日(土)

展示【第17回ニッサン童話と絵本のグランプリ入賞作品展】

期間:3月1日(木)~3月30日(金)

入賞した作品(優秀賞以上)と歴代の受賞作品を紹介します。

[こども室行事]

3月4日(日) 14:00~14:30

おはなし会「ひっこしのおはなし」

(ひっこしにまつわるおはなしを楽しめます)

当日参加自由 参加費:無料

3月11日(日) 大型ビデオ上映会

場所:当館講堂

「彫る・棟方志功の世界」

(日本民藝館と共に催で、棟方志功の画業をたどります。)

11:00~11:40 と 13:00~13:40 の2回上映)

対象:中学生以上 当日参加自由 参加費:無料

「今のアニメーション・昔のアニメーション」(「さばくのトッピイくん」「つりばしわたり」「茶目子の一日」)

(14:00~14:30 と 15:00~15:30の2回上映) 対象:

幼児~大人 当日参加自由 参加費:無料

3月20日(火・祝) 14:00~16:00

「作家と語ろう3 たけだみほさんと あそぼう」

(絵本作家たけださんへのインタビュー、ゲームなどを遊びます)

定員:50名(小学生・先着順) 場所:当館講堂

申し込み方法:往復はがきに住所、氏名、学年、電話番号、たけださんへの質問を書いて、当館T係まで

3月25日(日) 14:00~15:00

ワークショップ「おはなしであそぼう」

(こえやからだをつかって物語の世界を体験しましょう)

対象:6歳以上 当日参加自由 参加費:無料

募集 物語体験クラブ

4月~6月の第2、4土曜日 連続6回 10:30~12:00

こえやからだを使って物語の世界を体験します。

対象:小学2、3年生(4月現在)

定員:15名(先着順。6回とも参加できる人)

参加費:500円(6回分)

申し込み方法:往復はがきに住所、氏名、学年、電話番号を明記の上、当館T係まで

国際児童文学館 4月の資料提供

9:30~17:00 休館日:水曜日、30日(月)

展示【ローラ・インガルス・ワイルダーの世界—アメリカ開拓時代の

子どもの本ー】

期間:4月1日(日)~6月29日(金)

「大草原の小さな家」をはじめ、アメリカ開拓時代の子どもの本を紹介します。

国際講演会【イギリス絵本の現在—子ども読者と最近の作家たちー】  
英日両国で人気のある絵本作家・きたむらさとし、トニー・ロス等の作品の魅力を語るとともに、イギリスの子ども読者の状況を話していただきます。

共催:日本イギリス児童文学会

後援:絵本学会

日時:4月28日(土) 14:00~16:00

講師:ピーター・ワトソン氏(元ケンブリッジ大学教授) 通訳:田中美保子氏(翻訳家)

場所:当館講堂

参加費:1000円

申し込み方法:電話、メール、または当館カウンター

[こども室行事]

4月1日(日) 14:00~15:30

科学遊び「じしゃくであそぼう」

(じしゃくのふしづをさぐります)

講師:山方剛さん(「工作クラブ」主催)

対象:小学生以上 定員:30名 参加費:300円

申し込み方法:往復はがきに住所、氏名、学年、電話番号を明記の上、当館T係

4月14日(土) 15:00~15:30

おはなし会「たからもののおはなし」

(たからものにまつわるおはなしを楽しめます)

当日参加自由 参加費:無料

●日本童画美術館 イルフ童画館

【赤ノッポ青ノッポ展】 武井武雄代表作

11月23日(金)~1月29日(火)

昭和9年東京と大阪の朝日新聞に50回にわたり、小学生の巻を連載し、翌10年から11年にかけて新潮社版日本少年国民文庫全16巻に中学生の巻を発表。これは長い間日本の代表的なおとぎ話とされていた桃太郎の後日物語のようなものです。昔なつかしい「赤ノッポ青ノッポ」にあいにきてね……。

【特別展:版画・銅版画家 関野準一郎展】

2002年2月1日(金)~4月25日(水)

【大沢コレクション展】

2001年9月28日(金)~2002年1月29日(火)

大沢コレクションは武井武雄と親交の深かった故大沢三武郎氏が一点づつ収集してきた武井の作品の総称であり、武井が大沢氏のために命名したものです。より多くの人に童画に親しんでほしいとの願いから岡谷市に寄贈されました。武井のタブロー画の代表作品でもある「大沢コレクション」を一挙公開いたします。

【小品】「版画コーナーにて開催」

◎午前10:00~午後6:00(7、8、9月は午後7:00迄)

◎休館日 毎週木曜日(祝日の場合は開館) 7/25

展示替え休館 1/30(水)

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1

TEL 0266-24-3319(ミミズク) FAX 0266-21-1620

# 事務局からのお知らせ

## ●第5回絵本学会大会(2002年度)開催のご案内

絵本学会ニュースNo.13で第5回絵本学会大会を2002年6月15・16日に開催とお知らせいたしましたが、6月29日(土)・30日(日)に変更することになりました。6月15・16日は、サッカー・ワールドカップの神戸での試合と重なり、すでにホテルの予約が困難な状況です。日程が変更になりましたことをご了承ください。なお、2002年度の第5回絵本学会大会の概要が決まりましたのでお知らせいたします。内容の詳細および参加申し込み方法などは4月にご案内いたします。

○2002年6月29日(土)・30日(日)の2日間、神戸ファッショング美術館にて開催されます。

大会プログラムは、下記の通り予定しております。

○会場：神戸ファッショング美術館

〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中2-9-1

TEL.078-858-0050

(JR住吉or阪神電車魚崎→六甲ライナー「アイランドセンター」駅 徒歩1分)  
(ホームページをぜひご覧ください <http://www.kfp.co.jp/>)

○メインテーマ：“絵本はコラボレーションの場。”

○プログラム

2002年6月29日(土)◆第1日◆

13:00 受付開始

13:40 開会式

14:00 第1部 記念鼎談[元永定正+中辻悦子+谷川俊太郎]

15:10 第2部 フォーラム[元永定正+中辻悦子+谷川俊太郎]

16:30 サイン会

16:40 総会受付

17:00 2002年度絵本学会総会

18:00 総会終了

19:00 懇親会

20:30 懇親会終了

2002年6月30日(日)◆第2日◆

9:00 受付開始

9:20 研究発表+作品発表

12:00 昼食休憩

13:00 ラウンドテーブル(分科会)開始

R1 絵本表現研究 [絵本と漫画の境界] 話題提供者：

佐々木マキほか

R2 絵本作家研究 [太田大八の絵本]

太田大八ほか

R3 絵本受容研究 [絵本とコミュニケーション]

村中李衣ほか

14:50 ワークショップ

[絵本制作公開講座] 講師：小野明+土井章史

16:50 閉会式

## ●第5回絵本学会大会研究発表者募集●

○研究発表募集要項

1. 発表者の資格 絵本学会の会員であること。

2. 発表テーマ 絵本および絵本に関連のある研究テーマで、未発表のものに限る。

3. 発表時間 研究発表15分、質疑応答5分。

4. 申込要領

①発表テーマ ②発表者の氏名・年齢・住所・電話・FAX番号

③所属機関・職業等 ④発表要旨(800字程度)

⑤発表の際使用する機材(スライドプロジェクター、OHP、ODP等)

①～⑤をA4用紙に、原則としてワープロで横書きしたものを、絵本学会事務局宛郵送してください。

5. 申込締切 2002年3月31日(事務局必着)。

6. 発表者の決定 研究発表は、原則として無審査とし、発表順等については、5月中にお知らせします。

・受理した原稿等は返却しませんので必ずコピーをおとりください。

## ●第5回絵本学会大会作品発表者大募集!!●

### ●ワークショップ[絵本制作公開講座]参加者募集!!●

—絵本作家を目指す者よ！描け！語れ！—

○会場のギャラリーに展示コーナーを設け、応募作品を展示し、出品作家自ら制作の趣旨を発表します。

○応募作品から数点を選び、ワークショップ[絵本制作講座]の公開の場で、出版可能な作品に練り上げるための制作指導を行います。講師は、絵本編集者・デザイナーの小野明氏、フリー編集者・トムズボックス主宰者の土井章史氏が担当します。

○絵本作家を目指す人たちにとって、絵本制作の原点を学ぶ絶好の機会です。是非ふるって参加してください。

○以下の要領で作品発表者を募集します。

1. 発表者の資格 絵本学会の会員であること。

2. 発表作品 未発表の絵本。単独著作でも、共同制作でも可。

3. 発表形態 判型・寸法・頁数は制限なし。

原画全場面分+カラーコピー等により製本したもの1冊。

4. 発表時間 大会2日目の指定時間。

5. 応募要領 ①作品タイトル ②作者の氏名・年齢・住所・電話・

FAX番号 ③所属・職業等 ④原画サイズ・枚数

①～④をA4用紙にワープロで横書きしたものを、絵本学会事務局宛郵送してください。

6. 応募締切 2002年3月31日(事務局必着)

7. 発表者の決定 作品発表は、原則として無審査。

作品搬入の方法・発表の時間などは、5月中にお知らせします。

・ワークショップで制作指導する作品は、当日発表します。

## ●宿泊予約のお知らせ ●

○2002年6月は日韓ワールドカップ・サッカー大会が開催中で、神戸でも宿泊予約が取り難くなることが予想されています。

○学会では、会場の神戸ファッショング美術館に隣接する『ホテルブラザ神戸』を、メインの宿泊施設として確保する予定ですが、出来る限り早期に宿泊予約数を確定する必要があります。

- 宿泊費は、1泊朝食付でシングル¥11,000程度の予定です。
- 宿泊ご希望の方は、2月末日までに大会実行委員会まで、下記の必要事項4項目をFAXにてご通知ください。(締切厳守)
  1. ご氏名
  2. ご住所・電話・FAX番号・Mail-address
  3. 宿泊希望日・日数
  4. 人数・シングルorツイン

◆絵本学会大会実行委員会 FAX:0727-77-5646(香曾我部方)

#### ●運営委員会

9月22日 運営委員会 於：日本女子大学会議室

##### 議題

- ・第4回絵本学会大会決算報告
- ・大会運営費について
- ・第5回絵本学会大会のテーマと運営について  
2002年6月15日(土)・16日(日)の2日間、神戸ファッション美術館で開催することが決まった。  
大会実行委員長：香曾我部秀幸運営委員
- ・機関誌の創刊について
- ・運営委員の追加推薦について
- ・その他  
大阪国際児童文学館の存続について

11月14日 運営委員会 於：日本女子大学会議室

##### 議題

- ・第5回絵本学会大会の内容、進行組織について
- ・大会での絵本発表について（方法、時間、進行など）
- ・研究紀要について
- ・研究紀要の寄贈先について
- ・機関誌の刊行について
- ・その他